自由論題セッション報告申込用　要約フォーマット

氏名（Name）

長桶和也

所属・職（Affiliation）

北海道大学大学院　博士後期課程2年

報告タイトル（Title）

産業用ロボット企業の国際競争力に関する研究―ファナック社、安川電機社、ABB 社の製品戦略に関する比較分析―

キーワード（5 keywords）

産業用ロボット、日本企業、国際競争力、I-R フレームワーク、製品戦略

要約（Abstract）

1. 研究目的（Objective）

本研究は、産業用ロボット企業に着目し、日本企業が国際競争力を維持している要因を解明することを目的としている。日本企業の世界市場におけるプレゼンスが低下する中、産業用ロボットは、世界売上高上位5位に3社の日本企業が含まれており、日本企業が国際競争力を維持している一つの産業である。

しかしながら、産業用ロボットに関する研究蓄積は、重要であるにもかかわらず乏しい。産業用ロボットは、日本企業の課題を克服し、さらに業績向上に貢献することができるものであり、産業用ロボット企業を研究することは、学術的にも実践的にも意義がある。

2. リサーチ・クエスチョン（Research question）

本研究のリサーチ・クエスチョンは、次のとおりである。
第 1 に、三大産業用ロボット企業の製品戦略の違いは何か。
第 2 に、日本の産業用ロボット企業が国際競争力を維持している要因は何か。

3. 研究デザインと方法論（Research design/methodology）

本研究の研究デザインと方法論としては、修正した I-R フレームワークを用いて、世界三大ロボット企業であるファナック社、安川電機社、ABB 社を対象とした製品戦略に関する事例研究をおこなった。

4. 発見事項(Findings)

本研究の発見事項として、ファナック社は標準化と特注化の両立戦略をとっていること、安川電機社は特注化に重きを置きながら特注化製品の標準化をおこなっていること、ABB 社は標準化に重きを置きながら標準化製品の特注化をおこなっていることが明らかになった。そして，時系列的な分析からは，いずれの企業も修正した I-R フレームワークにおいて、トランスナショナル志向の製品戦略，特にファナックはトランスナショナルな製品戦略となっており、結果としてそのことが国際競争力を維持する要因になっていることが明らかになった。

5. 理論的・経営管理上のインプリケーション(Theoretical/practical implications)

本研究のインプリケーションは、次のとおりである。

第 1 に、日本企業が国際競争力を維持している要因は、特注化と標準化を両立するような製品戦略をとっていることである。

第 2 に、修正した I-R フレームワークによる実証研究をおこない、その I-R フレームワークが、産業用ロボット産業の分析において有用であることを実証したことである。

第 3 に、国際競争力のある産業用ロボット企業はトランスナショナルな製品戦略もしくはトランスナショナル志向の製品戦略となっており、これらが国際競争力につながることを実証したことである。

6. 限界(limitations)

本研究の限界は、次のとおりである。

第 1 に、中国や韓国など他国の産業用ロボット企業に関する分析が必要である。

第 2 に、分析単位を一つの企業に絞り、なぜ日本企業が国際競争力を維持しているのかを企業内部のマネジメントを含めて検討する必要がある。

第 3 に、事例分析のための手法の深化や情報源の多様化を図り、より客観的な分析をおこなう必要がある。

7. 独自性と価値(Originality/value)

本研究の独自性と価値は、次のとおりである。

第 1 に、研究蓄積の少ない産業用ロボットに関する研究をおこなったことである。

第 2 に、日本企業が国際競争力を維持する要因を製品戦略にもとづいて明らかにしたことである。

第3に、修正した I-R フレームワークを用いて産業用ロボット企業に関する実証研究をおこない、その I-R フレームワークの有用性を実証したことである。

※ スペースが足りない場合は、ご自身で追加してください。